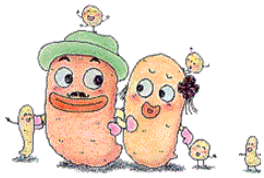
ゆ　ー　と　ぴ　や

湯戸飛夜いけいけだより

2021年7月1日　第52号



発行　西徳山まちづくりの会

記事：

・令和３年度まちづくりの会総会を開催しました

・連載小説
『男でござる　新説天野屋利兵衛』
第３回

・名所・旧跡めぐり
四郎谷の“天野屋利兵衛誕生地の碑”

・お願い
“鯉のぼり”をご提供下さい

・今後の行事予定

会員募集中
あなたも「西徳山まちづくりの会」で一緒に活動しませんか。会では、常時、会員を募集しています。

E-mail：
nishitokuyamamatizukurinokai@gmail.com

令和3年度まちづくりの会総会を開催しました

令和３年４月１７日正午から戸田駅前広場でまちづくりの会総会を開催しました。当日は朝から小雨が降っていましたが、正午には先ほどまでの雨が嘘のように青空が出ました。まちづくりの会の総会を手短にして、時節柄マスクをしての懇親会を開催しました。サザエ、イカ、貝柱とレンチョウ、サヨリ、カマスの一夜干しを炭火で焼き、熱い肴に冷たいビール、堪らなく美味い。むすび、漬物もうまい。新玉ねぎ、さつまいもも焼いた。美味い、美味い。参加者は９人でしたが、マスクをして楽しく話しながら懇親を深めました。

【令和３年度活動方針】

（１）戸田駅を中心とした活動を継続する
①西徳山の玄関口である戸田駅を「花の駅」として整備する
・戸田駅を花で飾る…花壇の花の種類を増やす。
・「湯戸飛夜いけいけだより」で「花の駅」を積極的にＰＲする。
②戸田駅前でのイベントを継続する（スタミナ補給 BBQ 大会、秋覚祭など）

（２）「道の駅ソレーネ周南」を拠点とした活動に取り組む
①「道の駅ソレーネ周南」の盛り上げに協力する（イベントへの参画など）

（３）西徳山の発展を目指した新たな活動に取り組む
①“観光資源”“自然環境”を活かした活動を目指す
・西徳山 3 地区の歴史・観光・史跡を紹介したＭＡＰをつくる（ウォークＭＡＰと連動）
・地元の有名人を探し「湯戸飛夜いけいけだより」で紹介する
② 西部地域のウォーキングコースをＰＲする
・「てくてくウォーク」のコースマップの作成とマップのＨＰへの登録

（４）交流・研修・広報活動に取り組む
①研修旅行、見学会の開催
②「湯戸飛夜いけいけだより」の定期発行

（５）組織を充実し拡大する
①会員増強
・広報、イベントを活用して会員を増やす
②会員の参加を促す
・会員の多くが参加できるイベントを考える
・映画鑑賞等のイベント

（６）他の諸団体と連携し効果的な活動を展開する
①他団体との連携
・地域で行われるイベントへ参加し、自治会などの地域住民とも連携して、まちづくり活動を継続する。
②行政との連携及び提案

連載小説

『男でござる　新説天野屋利兵衛』

第参回　　文　城山　耕作

喜兵衛（利兵衛）誕生

関ヶ原合戦から七十年が経っている。昭和の太平洋戦争から七十年も経つと、平和な世の中が当たり前になっているように、江戸時代の幕藩体制でも欠伸の出そうな日常が続くのである。江戸では人口も爆発的に増えて、世界でも有数の都市に発展して、経済活動も殷賑を極めていた。

各藩においては、そんな江戸と国元との二重生活に加え、幕府からはここを修理せよ、あそこの工事をしろと、お金がかかることばかり言ってくる。その上江戸では火事が頻繁に起きる。その火事に巻き込まれでもしたら、財政はたちまち逼迫してくる。どこの藩でも財政問題で頭を抱えていた。

徳山藩でも事情は同じである。藩主の就隆も三田の藩邸での暮らしにすっかり馴染んでいる。一国一城令で城はないが、大名とみなされている。四万二千石としての見栄もある。

出費もそれなりに嵩んでくるのである。

そんな中で、家老の神村将監は財政改革に乗り出した。財政の基本は「入るを量って、出るを制す」である。つまりどれだけの収入があるのかをしっかり把握して、それに見合って出費を抑えようという物である。将監にとっては、そんなことは言われるまでもなく知り抜いている。倹約はこれ以上できないほど既に実行している。さて、どうする、将監。

中国地方全土を治めていた毛利は、関ヶ原の戦で、いつの間にか西軍の総元締めのような地位に置かれた。あれよあれよという間に負け戦になり、防長二州に封じ込められたのである。しかし、毛利氏の偉いのは家来をリストラすることなく連れてきたのである。当然ではあるが、給料は大幅に削減している。これでは食べていけないので、武士でありながら、手に鍬をもって小さな畑を耕し家庭菜園のようなことをしたりして、糊口をしのいだのである。

そういった事情もあって、もうこれ以上の給料などの経費の削減は難しいと将監は考えた。それでは収入を増やせばよいのではないか。

「そうだ、物を売って、利益を上げよう。」

まもなく元禄時代を迎えようとしている上方や、政治の中心の江戸では物の需要が急激に増加している。今こそ徳山藩で生産する生活必需品を持っていけば、かなりの収入になる。藩が商いをやってはいけない理由などありはしない。

こうして徳山産の米、紙、塩の三白を特産品として、藩の専売品にしたのである。藩の役人に農業を勉強させて、徹底して営農指導に当たらせたり、農機具を貸し与えたり、肥料与えたりして、米の増産に取り組んだ。農業に本腰を入れたのである。決して金融に走ったりして、営農指導を疎かにするようなことはなかった。

紙も最初は品質が悪いなどとケチをつけられて、買い叩かれたりしたけど、藩による品質管理で、立派な製品として上方で高く売れるようになった。

そして塩であるが、福川に藩営の塩田を作って、塩の生産販売にも手を出していったのである。これがのちに赤穂藩とのつながりになってこようとは、この時の神村将監は知る由もなかった。

神村は藩主就隆に呼ばれて、江戸へ行くこともある。副市長の東京出張である。国元徳山の現状や財政のことやその他諸々説明する。藩主からお金の工面を頼まれることもよくある。呼ばれる理由はどちらかというとお金の工面のことが主な理由であった。

江戸では五代将軍綱吉が「生類憐みの令」を出して、江戸っ子らに顰蹙を買っているが、封建時代ではどうすることもできない。今では「周ニャン市」と言っただけで、市長が首になる世の中である。

そんな、とてつもなく忙しい将監であったが、萬のことはいつも彼の頭から離れることはなかった。忙しさの間にも逢瀬を重ね、いつしか萬の体の中には、新しい命が宿っていたのである。

（初代徳山藩主）就隆の憂鬱

ここで、筆者は天野屋利兵衛の伝説をもう一度確認してみる。西徳山農事放送電話農協刊の「ふるさと物語」の記述によると

『天野屋利兵衛の父親は神村将監といって、かつては禄千石を食んだ毛利家支藩徳山藩の家老職で、その子利兵衛の誕生地は戸田字四郎谷と伝えられている。

ところでこの将監がある日、遠乗りからの帰途馬をとばして富田川を渡ったところ、おりあしくその川下で、若殿が釣り糸

を垂れ楽しんでいた。そうとは知らぬ将監は馬から降りるでもなく川を渡ったのである。このことが若殿の怒りを買ったのである。この事情を知った将監は浪人して四郎谷に隠退したのである。ここで里の娘マンを後妻にめとり一子喜平をもうけた。後に大阪に出て商人になったということである。

一子喜平は成長して天野屋へ養子にもらわれて利兵衛とあらためたのが、世にいう義商天野屋利兵衛ということである。』と書かれている。地域の伝説は、伝説として大事にしておきたいと思うのだが、天野屋利兵衛の存在をより信憑性のあるものにしたい筆者としてはフィクションとノンフィクションの間を行ったり来たりして、新説天野屋利兵衛を探ってみたい。

それでは、今回の題名である（初代徳山藩主）毛利就隆の憂鬱を書き始めるとする。

就隆は、曾祖父があのレジェンド毛利元就であり、父親は関ヶ原合戦で西の総大将を務めた輝元である。敗戦後輝元は萩に閉じ込められて家督を長男に譲り、次男の就隆には徳山藩を分家として与えている。

そして今、徳山開府からおよそ六十年経っている。就隆の分家が十七才だからもう喜寿になる。就隆は来し方を回想する。

（思えば人生短いものだ。まだまだやり残したことがたくさんあるような気がする。若いころには長府藩から嫁をもらったが、気にいらないので離婚した。

本家が幕府から「桜田見附の矢倉の修理」を仰せつかった時のことだ。萩の本藩は出費がかさむので、徳山にも応分の負担の申し入れをしてきたが、「徳山には関係ない。」とあっさり断りもした。

その後六十七歳で妾腹の子が生まれた。そして七十の歳には継室が男の子を産んだ。

ここ最近は、江戸は三田の藩邸から出ることも少なくなり、徳山がどうなっているのかわからない。すべては神村将監に任せたきりである。

儂も年を取ったものである。あの世へ行ってからの後のことが気になるが、後添えの子の元賢が後を継ぐことにしている。もう七歳になったはず。）

今では喜寿はそこら中、出会う人ごとに後期高齢者であるが、当時としては大変長寿で、珍しい存在であったであろう。六十数年の長きにわたり、藩主を務めた就隆であったが、わがままで不満の多い人生でもあった。総てがこのようであったので、神村将監はじめ藩の幹部らの苦労は推して知るべしである。

ローマ帝国の政治家で哲学者のセネカは、その著書「生の短さについて」で、生は浪費すれば短いが、活用すれば十分に長いと説いている。

話を元に戻そう。

就隆は三田の藩邸で息を引き取った。齢七十八歳であった。その後、定石通り継室の子元賢がわずか十歳で藩主に就任し、順調に進んでいるかに思われたが、この幼い藩主は病弱で二十一歳でこの世を去った。

では、つぎの藩主は誰になるのか焦眉の問題であった。どこの藩でも後継ぎの争いで，藩の幹部らが分断されて大喧嘩のもとになっている。太古の昔より権力の座をめぐり、途絶えることのない争いを繰り返してきたのである。

徳山藩では妾腹の子の元次がいる。一方で、これを良しとしない萩の本藩は、長府藩の次男を迎えるように動いた。神村の立場は本藩の意向に逆らうことはできないので、元次の後継に反対ということになった。

だが、元次は聡明で、徳山藩の幹部らに何ら反対する理由を見いだせず、あっさりと三代藩主には元次が決まってしまった。

藩主の元次は、神村将監を呼んで、

「この度の後継問題での神村の立場はよくわかる。そなたのこれまでの働きや功績にも大なるものがある。そなたを失うのはわが藩にとって大きな痛手である。しかし、このままでは他の藩士に示しがつかない。信賞必罰はわが信条である。よって神村家の断絶を申し付ける。」と言い渡した。

将監は静かに頷いて、「謹んで承ります。この後は四郎谷にて、余生を過ごすつもりにございます。」　どこかほっとした心の安らぎを感じた。元次も「そうであるか、徳山藩にいてくれるのだな。」とほほ笑んで言った。

伝説では、四郎谷へ移り住んだ将監は里の娘マンとの間に一子喜兵衛をもうけたとあるが、それでは赤穂浪士の事件まで余りにも時間が短いので、筆者がこれまでに書いてきたように、すでにマンとの間に喜兵衛は誕生しているか、あるいはすでに上方へ出て居るかのどちらかであろう。

続きは次号でそのいきさつについて書いてみたい。

編集後記

ＳＤＧ’ｓというのをご存じだろうか。「当然知っている」といった答えが返ってくるだろうとは思うが、今一度再確認をしておきたい。

持続可能な開発目標ということで、国連が２０３０年までに、貧困や飢餓への対策、気候変動や海洋汚染などへの具体的取組など１７項目の目標を掲げている。

自治体の職員などがＳＤＧ‘ｓバッジを襟につけたり、企業が取組を宣言したりしているが、日本国としてその取り組みが世界をリードするものであってほしいし、私たち一人一人が意識を持つことが大事なことだと思う。

では、私たちは具体的に何をすればいいのだろうか。地球規模で物事を考えて現状を憂えたりしても始まらない気がする。２０３０年までに残り９年しかないと焦ってみても仕方ない。グローバルに考えることやタイムスケジュールを作ることは確かに大事なことではある。

わたしたちまちづくりの会は、戸田駅前で「いけいけフェスタ」を行ってきた。その時もったいない運動も展開し、何年か続けてきた実績もある。

そうだ。ＳＤＧ’ｓとはもったいない運動そのものではないか。西徳山まちづくりの会ではもったいないを合言葉に活動を続けてみよう。

発行責任者
会　　長　　神本康雅
広報部長　　木曽裕子

西徳山まちづくりの会
ホームページ URL:
nishitokuyama.web.fc2.com

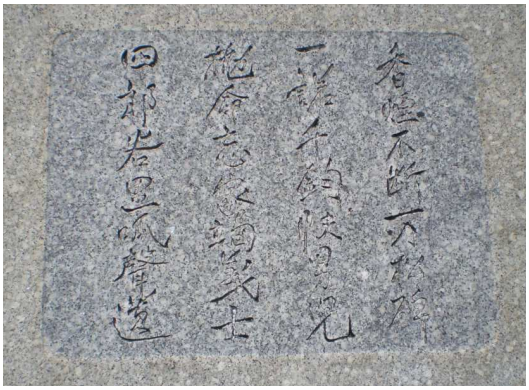
シリーズ「名所・旧跡めぐり」

四郎谷の“天野屋利兵衛誕生地の碑”

「天野屋利兵衛は男でござる」と役人に啖呵を切った天野屋利兵衛は赤穂浪士討ち入りの影の英雄として知られています。彼は、周南市戸田四郎谷に生まれたと言い伝えられています。

四郎谷の東、山陽本線沿いの小高い丘の麓にある案内の碑。ここから急な山道を息を切らせながら５分登ると山頂の広場に到着します。この東端に天野屋利兵衛誕生地の碑があります。

碑の表面



碑の裏面

お願い “鯉のぼり”をご提供下さい

ソレーネ周南の親水公園に毎年５月に鯉のぼりを上げています。お宅で眠っている“鯉のぼり”はありませんか。ご提供いただける方は、ソレーネ周南までご持参ください。

今後の行事予定

戸田駅前広場周辺の清掃

毎月第２、第４土曜日の１６時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。
お手伝いしていただける方、大歓迎です。